

家族の顔がわからなくなってきた…

⇒認知症の人に寄り添い、想いを伝え続けましょう

【 認知症の人の状態 】

とよさと病院 認知症疾患医療センター
2022.6作成

認知症の後期になると、最近の記憶だけでなく、過去の記憶も失われていきます。最初は、家族の名前や続柄などがわからなくなるようですが、次第に一緒に住んでいる家族の顔も判別できなくなることがあります。家族にとってはつらいことですが、おそらく本人も心細く、不安に感じていると思われれます。

また、言葉も不自由になるので、会話も難しい状態になります。覚えている単語の数も減り、脈絡のない単語だけを口にする場合もあります。

同時に、歩く力が低下するなど、身体機能も衰えていって、やがて寝たきりになる人が多いようです。



このような状態になっても、家族は認知症の人に寄り添って、「いつまでも一緒にいますよ」「私たちは、あなたがいてくれるだけで幸せなのですよ」ということを伝え続けることが大切です。

【 対応方法 】

①顔がわからなくなった場合でも、はじめの頃は、思い出すこともあります。ただし、記憶の逆行性喪失の特徴により、若い頃の自分に戻ってしまっている人が多いようです。“自分の子どもはまだ10歳”“妻は30歳だ”と感じ、現在の状態がわからなくなっているのは、認知症のごく自然なことだと受け止めていきましょう。

②会話によるコミュニケーションが難しくなったときには、表情や身体に触れるコミュニケーションを試みましょう。不安そうにしているときは、手をにぎって微笑んだり、肩に優しく手を置いたりするとよいでしょう。

③会話をして、すぐに反応がなかったとしても、諦めずに、繰り返し言葉をかけてみましょう。反応のなかった認知症の人が、ふと一言、言葉を発することがあります。ときには、相手のことを、明らかにわかっているように語る人もいます。

④たとえ言葉を出せなくても、感謝の気持ちを伝えようとしていることがあります。目が合ったときに認知症の人が微笑んでいたら、**微笑み返す**とよいでしょう。

⑤認知症の症状が強く、家族で対応することが難しくなってきた場合には、**特別養護老人ホームの入所**についても検討するようにしましょう。人気のある施設は、入所者が多いことから、望んでもすぐに入所できない例が多々あります。希望する施設がある場合は、事前に資料をもらったり、見学したりして、現状を知っておくことをおすすめします。

参考文献：杉山孝博, 認知症の9大法則50症状と対応策, 法研, 2013, P152-153

2022.6作成

ケアのコツ…「承認」は連鎖する



「承認」には、「誰かから認められる」という意味があります。それぞれの家族は、家族ごとに背景は違い、介護負担もさまざまです。その中で、どの家族も精一杯の介護をしながら生活しているわけですから、「承認」は家族（介護者）の気持ちを開放するうえでも重要です。

「承認」には、二つのポイントがあります。①具体的な行動がもたらす具体的な影響を伝える…例：『お母さん（介護者）と一緒に散歩しているときのお父さん（認知症本人）は、嬉しそうだよ』 ②自分が承認される体験があると、他人を承認しやすくなる…①のように介護者に伝えることで、介護者が本人の言動を受け止め、その気持ちを汲み取って、承認する言葉がけができる余裕も生まれます。

参考文献：ペhos, “理由を探る” 認知症ケア, 株式会社メディカル・パブリケーションズ, 2014, P229-231



とよさと病院

認知症疾患医療センター

TEL 029-847-9581